

## 境忠一著 「評伝宮沢賢治」

海老井, 英次

<https://doi.org/10.15017/12230>

---

出版情報 : 語文研究. 26, pp.75-77, 1968-10-31. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

## 『評伝宮澤賢治』

海老井 英 次

「後記」に述べられているように、昭和二十四年頃以来という、著者の賢治に対する愛着の結晶といえる好著である。

「わが国には稀な幻想家Ⅱ存在論者としての賢治」の人と文学を、「一介の『農村インテリ』と、かりに『民俗の伝統』とでも名づける風土との結びつきに、賢治という『特異な意識』を設定することで、把えることに本書の目的がおかれている。

序章 宮澤賢治観の変遷 において、草野心平にはじまり、高村光太郎・中島健蔵・谷川徹三・国分一太郎・佐藤勝治・中村稔などによる賢治観の変遷を、各々の時代的色彩を明らかにしつつ概括した上で、「文学が、宗教であり思想であるという過重な役割を持たなければならなかった」近代日本の「文学的存在」として賢治を把握しようとする著者の基本的姿勢が明らかにされる。近代文学の流れから孤立した姿で、賢者・天才の魅力として評価されがちだった賢治の文学を、「封建制と後進資本主義の癒着の上に生れ」、しかも「農村の後進性と密接に結びつ

いている」ゆえに、近代文学の「範型としての可能性」を有するものとして把えなおそうとする著者は、「農村インテリ」「民俗の伝統」「特異な意識」の三つの照明によって、賢治文学の全体像を浮かびあがらせようとされる。

ここで目次を紹介すると次のようになっている。

序章 宮澤賢治観の変遷

第一章 家―出生より盛岡中学卒業まで―

一 出生と家業 二 家系 三 岩手具花巻 四 幼年伝説 五

盛岡中学校

第二章 信仰―盛岡中学卒業後より上京まで―

一 煩悶と入信 二 盛岡高等農林学校 三 土性調査と国柱

会入会 四 上京

第三章 心象―直観像学説と幻視の文学―

一 「心象スケッチ」の名称 二 心象の意義 三 直観像学

説と賢治の心象・幻覚 四 幻覚と直観像

第四章 詩歌―「春と修羅」第一集をめぐって―

一 「春と修羅」第一集の構成と詩法 二 「冬のスケッチ

」の成立 三 「春と修羅」 四 「真空落煤」より「東岩

手山」まで 五 「無声痛哭」「青森挽歌」 六 「風景と

オルゴール」「序」 七 「春と修羅」の出版

第五章 童話―作風の変遷と系列―

一 序 二 初期の散文 三 上京前の童話 四 上京中、ある

いは年代不明の童話 五 「注文の多い料理店」とイーハ

トウ童話 六後期の童話への系列

第六章 教師―裨貫Ⅱ花巻農学校時代―

一 裨貫Ⅱ花巻農学校 二 トシの死 三 「注文の多い料理店」の出版 四 国民高等学校

第七章 農民―羅須地人協会時代―

一 依願退職 二 羅須地人協会 三 「農民芸術概論綱要」

四 稲作指導と肥料設計

第八章 愛―禁欲をめぐる―

一 愛と自然 二 禁欲と女性観 三 二人の女性

第九章 晩年―病床時代より終焉まで―

一 病床時代 二 東北碎石工場技師 三 遺書と手帖 四 終焉まで

第十章 思潮

宮澤賢治の自然交感 一 自然詩人としての賢治 二 観照的自然観の否定 三 短歌におけるアニミズム的傾向

四 自然交感の発展

宮澤賢治への近代詩の投影 一 序 二 石川啄木 「一握の砂」と「賢治歌集」 三 北原白秋と「春と修羅」 四

山村暮鳥「聖三稜玻璃」と「冬のスケッチ」 五 萩原朔太郎「月に吠える」と「春と修羅」 六 結び

各章にわたって逐次その内容を紹介することは、紙数の関係上不可能なので、煩瑣にすぎない程詳しく紹介した目次によって本書の姿を想像いただくとして、本書の概要と、二、三の点についてのより詳しい言及によって、紹介の責を果させていた

だこうと思う。

第一章から第九章まで、各章にわたって、宮沢清六他による論述や聞書を援用して賢治の伝記を構成し、作品からの引用によって賢治の人と文学との関連を考察している。賢治にとかくつきまといがちな伝説を「特異な意識」の面から説明するとともに、質商の長男という出自による賢治の社会的劣等意識を、「妙法蓮華経」への帰依と「農村インテリ」の交叉によって把握え、さらに「土神」「デクノボー」など東北的風土の擬人化表現に片鱗を示す「民族の伝統」の考察を加味することによって、賢治の人と文学が全体像として造型されようとしている。勿論、著者は上記の三要素を単純に分化して適用しているわけではなく、それらの錯綜した地点に、賢治文学の魅力、近代文学史上におけるその孤高性をみ、同時に賢治を文学史上に組入れる困難な試みが企図されているのである。

賢治文学解明の要路である「心象スケッチ」の語に肉迫した第三章において、著者は賢治の用例における四つの特徴（視覚的実在感が強いこと・視覚的意味に用いられること・明滅するイメージ・気圏意識）をまとめた上で、エールリッヒ・イェンシュなどの直観像学説を応用して、中間帯現象――直観像や幻覚、共感覚を含めた未分化な意識の現象をあらわすために、賢治は「心象」ということばを使っているように思える」と結論している。賢治の詩語「鳥の紐」などの難解さが、この「中間帯現象（色聴）」の応用によって解決されるとともに、「特異な意識」と「心象スケッチ」の関連の解明が示唆されているといえよう。

第四章では、詩集「春と修羅」の成立、「心象スケッチ」という独自の詩法の確立を、「冬のスケッチ」や、さらに先行する短歌における「素朴実在論的な発想」の方法化として把え、「土着的、現実的、個人的であることが、同時に超自然的、普遍的な——賢治のことばでいえば「四次元」的な（この「心象スケッチ」という）表現法は、「歌集」「冬のスケッチ」を経て、詩形式を持った」と論証されている。

第五章。「文学の密林」とも称される賢治童話を、作風の変遷をたどることによって系統だてるといふ困難な試行が展開され、章末に「宮澤賢治散文作品系譜」として結実されている。

第十章は二論文によって構成され、東北の一隅花巻にその生

活空間をほとんど限定したものであるとして把えられがちだった賢治と、東京の文壇の動きを追うことで自足していたこれまでの文学史と、この並列的な二者を有機的に結合すること、すなわち近代詩史上に賢治を定着させる一つの試みとしての意味をもっている。

なお、巻末に「付録」として、新発見短歌二十九首をはじめとして、「岩手県稗貫郡地質及土性調査報告書第一章」の転載など三十ページにわたる資料紹介と、「宮澤賢治所蔵図書目録」五ページ、「参考文献」四ページが付加されており、親切な編集になっている。（昭和四十三年四月桜楓社刊。四七一ページ 一八〇〇円）

▼受贈雑誌 昭和43年1月～6月（その三）

- 甲南大学文学会論集 35
- 愛文（愛媛大学） 6
- 高知女子大学紀要 16
- 日本文学研究（高知・同会） 6
- 国語の研究（大分大学） 3
- 国文学研究（梅光女子学院） 3
- 文芸と思想（福岡女子大学） 31
- 九州文化史跡研究所紀要 13
- 文学論輯 15
- 有明工業高等専門学校紀要 3
- 佐賀竜谷学会紀要 14
- 佐賀大学文学論集 8

- 佐賀大学人文紀要 3
- 国語国文学研究（熊本大学） 3
- 鹿児島大学文科報告 3
- 薩摩路（鹿児島大学） 12
- 国語研究（国漢筑豊） 10
- 研究論叢（筑紫古文研究所） 1
- 能楽思潮 42～46
- 朝鮮学術通報 4巻4～5巻2
- 文献ジャーナル 7巻1～5
- 肇国 302～308
- 白路 22巻11～23巻6
- 日米フォーラム 11～6月

- 八雲 12～4月
- コロニア文学 4・5
- 美夫君志 11
- 華 10
- 城 36
- オルペウス 1